



1300度とは白炎の世界



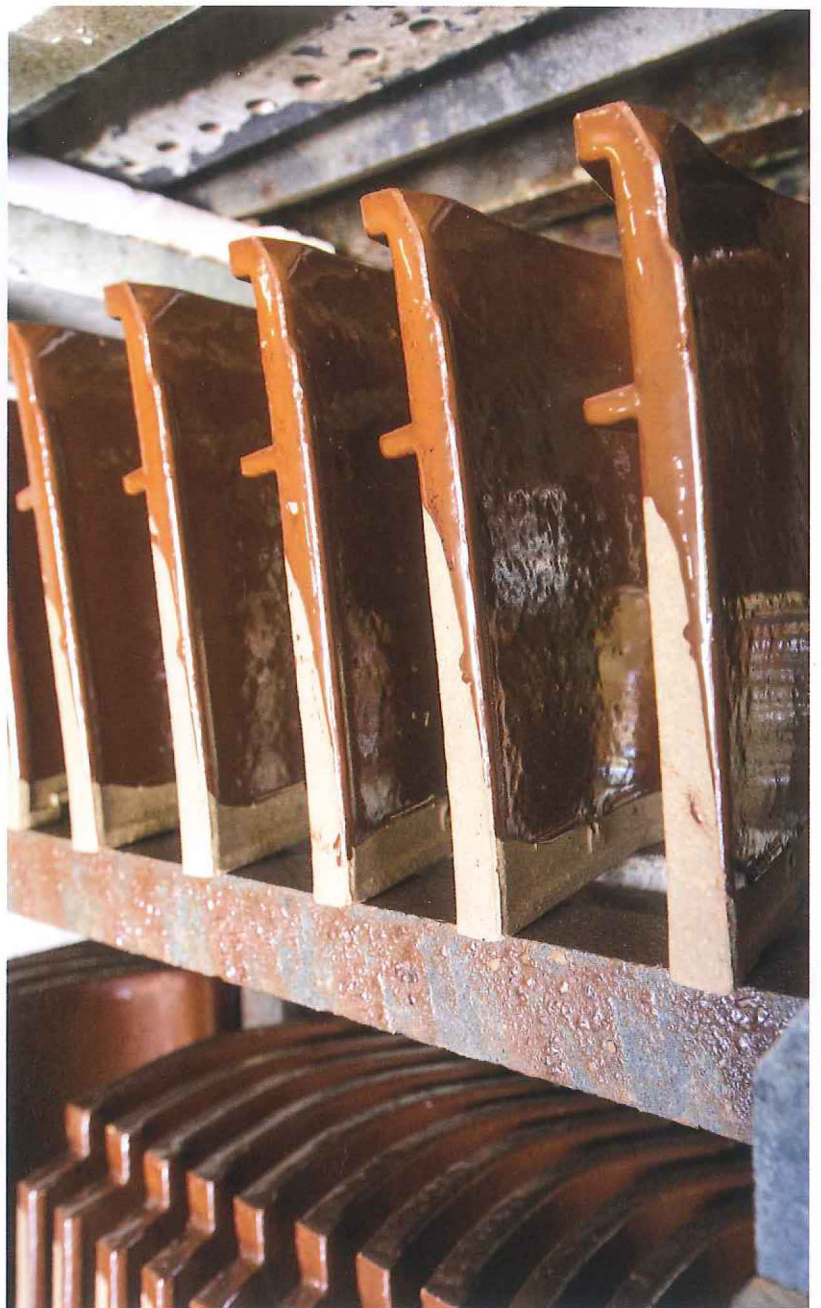
1300度で発色する来待釉



単窯ゆえすべて手積み手おろしの作業



本来待の美しさを身近にと、つくった湯飲みやおろし小皿は大人気である



九代目 亀谷典生さん

亀谷窯業株式会社  
島根県浜田市長沢町736  
電話 0855-221807  
<http://user.iwamincarv.jp/honkinmachi/>

## 石州本来待瓦をつくる

浜田市 亀谷窯業

寛延元年（1748年）浜田藩の瓦師となり瓦を製造。その後、文化三年（1806年）には亀谷瓦工場となつて、来年260年を迎える亀谷窯業。

初代から受け継がれる石州瓦を守り、来待石だけの釉薬を使い、その強度と発色のために1350度で焼成する、他ではまねのできない、石州本来待瓦（せしゅうほんらいまちがわ）をつくりつづけている。

日本全国ほとんどの瓦工場は、トンネル窯と呼ばれる長さ百メートルにも及ぶ窯で焼く。瓦を載せた台車がトンネル内に入ると、余熱、焼成、冷却という工程が自動で行われ、トンネルを出れば焼き上がりというものだ。

人件費、燃料代、さらには温度ムラが少なく製品にばらつきが出にくいという、いいこと尽くめなのである。

だが、トンネル窯で亀谷さんの焼成温度・1350度を出すと、窯がたちまち傷んでしまう。

亀谷さんの工場は、トンネル窯の恩恵より、本来待の強さを求める。製品のばらつきへの負担は大きく、世にいう歩留まりは極端に悪い。

しかし、世界遺産の街並み保全や、石州瓦本来の味わいを求める者にとって、最後の頼みの綱となっている。